

校長室だより

# 共学共高

第  
6  
号

令和3年6月22日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

## 「生徒間の対話のある授業」part3

国語科 N 先生の 3 年生現代文 B の授業にお邪魔した。

この日の授業は、2007 年大学入試センター試験に出題された、『日本の庭について』（山本健吉著）の途中部分からの学びである。N 先生は、演習の授業であっても、生徒間の対話をかなり取り入れ、授業実践をしている若手教員である。

先生「前回までに読んだ 3 ページの空白までの内容を隣同士で共有してください。」すると、生徒たちはすぐにペアとなって、活発に前時までに把握した内容を交換し合う。普段からこうした意見交換が頻繁に行われているからなのか、このクラスの生徒たちは臆することなく互いに率直に考えを出し合える「開かれた関係」になっていることがわかる。全体の前で発表させることはしないが、N 先生は教室内を回りながら、声をかけたり、考えを聞いたりしている。

先生「そうですね。今、話し合ってくれたように対比の構造を押さえることが大切でしたね。何の対比かというと・・・日本と西洋との自然に対する対比ですね。日本では自然は変化するものとされているが、西洋では、自然は人間が手を加えた不変なもの、人工物とされているのですね。」

先生「では、傍線 B を読み、問 3 を考えましょう。日本の芸術の特徴を選択肢から選んで下さい、という設問です。日本の芸術のどのような点を強調するのでしょうか。ペアでどの選択肢を選んだか、根拠とともに出し合ってください。」と投げかける。生徒たちはすぐに活発に意見を出し合う。教室内のさまざまなところから「・・・ではないか。」「ここも合っている?」「～だから・・・では?」といった声が聞こえてくる。

正面のホワイトボードに本文の映像が映し出される。先生がおもむろに「正解は 4 です。」と全体に伝える。生徒たちからは「ええーっ」という声が複数上がる。先生「なぜ 4 が正解になるのか、これが書かれているから正解なのだ、というポイントを探そう。」との投げかけがなされる。生徒たちはペアで探し出す。先生は教室を回り、いくつかのペアとやり取りをする。さらに、『『芸術におけるこの表現意識の弱さ』がポイントですね。』『なぜこれが書いてあると、正解なのか、本文に根拠を探してください。』と投げかけが続く。生徒たちは「こっち?」「ここ?」「うん」などと確認し合う。先生「(本文に出てくる) 生け花は具体例です。抽象的な話があって、それをわかりやすくするのが具体例。つまり、抽象的⇒具体

例⇒まとめ、となります。」・・・「・・・造形意思が極端に弱いのが日本の芸術である・・・この造形意思が表現意識に置き換えられているところが難しいところですね。」

先生「次に傍線 C ですね。『この庭の絶賛者の一人に志賀直哉がある』とあるが、志賀が絶賛したのはなぜだと、筆者は考えているか。」ペアで話し合ってください。・・・・・・先生「いきなり志賀の文章の引用があります。引用も具体例ですから、その前か後ろに筆者の主張である『まとめ』があるはずですよ。」「選んだ選択肢で挙手をしてください。1を選んだ人・・・5が一番多いですね。正解は5です。」「なぜ、正解が5なのか、根拠を本文から探しましょう。」「根拠を探す、この時間が一番大切ですね。」生徒たちは先ほどまでと異なり、すーっと沈黙する。各自で考えているのだ。少しすると、再び活発に意見校交換し合う。生徒「ここなのだろうな・・・」

先生「問題を解くときに、すぐに選択肢を見てはいけません。問題文を読んで、何を述べるべきかを自分で確認してから、選択肢を読みましょう。そこが定まらないまま選択肢をみると、迷ってしまいます。」なるほど。限られた時間内で解くことを考える受験生は、すぐに選択肢に目を移して正答を選ぼうと、急いでしまいがちだ。作問者は、その選択肢が正答であるという根拠、逆に誤答であるという根拠を意識して選択肢をつくる。そうした作問に私自身13年間携わってきたではないか。N先生の言うことがよくわかる。

「最後に傍線 D の『この非日常性は、例外と言うべきである。』とありますが、非日常性とは何のことですか。ペアで共有してください。」生徒たちは、自分で見つけた後にペアで共有し合っている。先生「龍安寺の石庭のことを扱っています。その非日常性とは・・・」先生は、本文が映し出されたホワイトボードに印をつけながら、『息詰まるような窮屈きわまる庭なのである』という部分に傍線を引く。「非日常性とは、くつろがせるような庭になっていないということですね。こうして自分なりに述べるべきことを確認してから選択肢をみると、3が対応しているからそれが正解となります。」

N先生が授業で大切にしていることは、「根拠をもって選べたのか」ということである。これは何も現代文の読解にのみ当てはまるものではないだろう。私たちが何かを選んだり、決断したりするときには、「根拠をもって」ということは極めて大切なことである。校長は全校生徒や中学生・保護者の前でお話しする機会も多い。私自身も「エビデンス（証拠）に基づいた内容なのか」ということは意識するようにしている。（常にそうなるかどうかは疑わしいが）

N先生の授業を参観して、センター過去問を解いてみようかなという気にさせられた。私たち教員は、生徒の心に灯をともし授業を目指したいものである。



(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)